

「予言」

☆☆☆

2004 (平成16) 年9月22

日鑑賞<東宝試写室>

監督：鶴田法男

里見英樹／三上博史

立原綾香／酒井法子

若窪沙百合／堀北真希

鬼形礼／山本圭

御子柴聡子／吉行和子

東宝配給・2004年・日本映画・95分

<コワくて大人気のJホラー！>

私はホラー映画は大キライだが、日本発のホラー映画は大人気で興行成績も軒並み上々。そればかりか、香港やアメリカでリメイクされる状況となっており、『予言』のパンフレットによれば、今やJホラーは、「ブーム”の域ではなく、“ジャンル”として確立したと言っていい」状況とのこと。ちなみに1997年以降、大ヒットしたJホラーの代表作は、『リング』（98年）で、『リング2』（99年）、『リング0』（99年）、『ザ・リング』（03年）などの続編もつくられた。近年は、『呪怨』（03年）、『呪怨2』（03年）、そして2004年は、『着信アリ』と続いている。本公開では、この『予言』は『感染』と同時上映されて、恐怖をダブル加速させる方針とのことだが、今回の試写は、『予言』の一本だけ。

私は観ようかどうか大いに迷った挙げ句、思い切って……。『怖いもの見たさ』という気持はなかったが、のりピーこと酒井法子の出演にちょっと惹かれたことは、たしか……。

<私の中でのホラー映画のトラウマ？>

ホラー映画を観た後、「ネエネ、〇〇は気持ち悪かったね！△△も恐かったね！」というおしゃべりに「出会う」ことがよくある。しかし、私に言わせれば、本当に気持ち悪かったら、また本当に怖いと思ったら、じっとスクリーンを観ることができないはずだ、と思ってしまう。もっとも、それではホラー映画を楽しんだ(?) ことにはならないのだが……。そう考えると、上記のような会話をしている人たちこそが、本当にホラー映画を楽しんでいるのだろう。

しかし、私はダメ。私には、ホラー映画にまつわるトラウマ(?) がある。それは、私が小学生の低学年の頃に観た、タランチュラの映画。よく覚えていないが、ある孤独な科学者が研究を重ねているうちに巨大な蜘蛛-タランチュラが生まれるというもので、その恐さといったら、もう……。それ以来、私はホラー映画がキライになり、本当に怖いシーンになると、私は目をふさいでしまう……。実はこの『予言』でも、上記の会話に出ていたようなシーンは、私は目をふさいでいたので観ていない……。

<わかりやすい(?) Jホラー？>

この映画の原作は、つのだじろう氏が1973~75年まで週刊少年チャンピオン誌で連載した漫画『恐怖新聞』。映画の冒頭、妻の綾香(酒井法子)が夫の英樹(三上博史)と一人娘の奈々(井上花菜)を乗せて、車を運転している楽しそうな家族の姿が登場する。もっとも、綾香と奈々は歌を歌って本当に楽しそうだが、夫は仕事に追われているため、後部座席でパソコンを操作中。そんな夫から、メールを送りたいので電話BOXに立ち寄りたと言われた綾香は、「お父さんも一緒に歌を歌ってくれること」を条件に、車をバックさせた。

車に二人を残して、英樹は電話BOXに入り通信していたが、その時目に入ったのが、奇妙に黒ずみ古ぼけた新聞の切れ端……。何気なく、それを手にした英樹は、「帰省中の乗用車にトラック突っこむ 女児犠牲に 里見奈々ちゃん(4)死亡」と書かれている記事を見て、愕然とした。そして「今、何時だ？」と腕時計を見たところ……。夫の様子がおかしいと気づいた綾香は車から降りて電話BOXに近づき、「大丈夫？」と声をかけたところ……。奈々ちゃんを後部座席に残した車に、でっかいトラックが真正面から激突。乗用車はひとたまりもなくつぶされてしまい、漏れ始めたガソリンに火がつき、必死に助け出そうとする両親の前で爆発、炎上。新聞の予言どおり、奈々ちゃんは死亡、悲惨なことに。これは一体なんだ、と思うものの、まさにこの「恐怖新聞」による「予言」が、この映画のテーマだということが、よくわかる。

<久しぶりに見た山本圭>

『恐怖新聞』の黒幕(?) は、山本圭扮する鬼形礼という、いかにも不気味な雰囲気な男(老人?)。山本圭は、私が大学に入学した直後、『若者たち』(68年)にカッコいい役で登場し、学生運動仲間たちの大人気を得ていた俳優。また、山本薩夫監督の大作『戦争と人間』(70年、71年、73年)でも、軍国主義が進む日本において、日本共産党を支持して戦争に反対するという大学生、標耕平役で登場し、五代財閥の娘順子(吉永小百合)に、ホレられるという実にいい役を演じていた俳優。少し長髪で、いつも冷静で知的、そして純粋で人間的という理想的なタイプの役が多かっただけに、この鬼形礼の役には少しびっくり。もっとも、山本圭も1940年生まれだから、もう64歳。老人の役を演ずるのも仕方ないか……？

<やっぱり、ややこしくて恐かった、Jホラー>

前述のように、当初のストーリーはわかりやすく、これ位のホラー映画なら私でも大丈夫と思って観ていたものの、話はそれほど単純ではなかった。次第にややこしいストーリーが加わり、そして少しずつ怖いシーンも……。特に学校の教師をしている英樹の教え子である若窪沙百合(堀北真希)が第2の犠牲者となったり、精神病院で奇妙な少年(?) が登場したりしているうち、時々目をふさぎたくなるような恐ろしいシーンも……。やっぱり、Jホラーは恐かった……。今どきの若者は、どうしてこんな映画が好きなのかな……？

2004 (平